

ウィトゲンシュタイン哲学における 主体について (2)

井 原 奉 明

On Subject in Wittgenstein's Philosophy (2)

Tomoaki Ihara

Abstract

This article is the second part of a series of research on the theme of subject in Wittgenstein's early philosophy. The period is defined as his middle-period, which roughly lies between *Tractatus* and *Philosophical Investigations*. In this article the author deals with the first phase of his middle-period philosophy, which started in January 1929 and ended in April 1930. He must have accepted the criticisms to the *Tractatus* ontology from Sraffa, Ramsey and Schlick, and couldn't but abandon the mutual independence of elementary propositions, which is the key concept of *Tractatus*. Then, he put a new focus upon immediate experience and language by introducing a novel notion of grammatical form and space instead of logical form and space. It seemed to him that the problems raised with the help of his friends would be solved in the new ontological framework, but he found out another problem right away. This article discusses why and how he changed his theory.

私はこう言いたい。「たしかに、正直に言えば、私には他の誰にもない何かがある、と言わなくてはならない。」——しかし、その私とは誰なのだ？ ——くそっ！ 私は言いたいことをうまく表現できないけれども、何かがあるんだ！ 私の個人的な経験というものがあって、それがきわめて重要な意味で隣人というものを持たないということは、君だって否定できまい。——だが君は、それがたまたま孤立して単独だと言うつもりなのではなくて、そいつの文法上の位置づけが、隣人を持たないポジションなのだとするつもりなのだろう。

「しかし、どういうわけか我々の言語は、他と並ぶことのない特異な何かがあるということ、すなわちほんとうの現前する経験があるということを、表に出すことがないのだ。君は、私がそのことを不可避なこととして受け入れることを望んでいるのか？」(「私的経験」と「センスデータ」についての講義のためのノート)」¹

はじめに

本論文は、初期および中期ウィトゲンシュタインの「主体」に関する考察を研究対象とするものであり、本稿は、その論究の第二回目にあたる。前稿²の第一回にも記したが、本研究の目的は、ウィトゲンシュタインの「主体」に関する考察を整理し明晰にすること、およびウィトゲンシュタイン研究において解釈上の新しい論点を提示することである。解釈上の新しい論点とは、＜わたし＞に関するものである。本研究においては、私の特別さ、私には比類のない何かがある、私は他者と違う優位な位置を占めているという思いを＜わたし＞と表現し、＜わたし＞がどのように表現されるかに関す

る彼の考えを探る。

前稿において示したように、『論理哲学論考』（以下『論考』と略記）の思考圏において、〈わたし〉は論理空間の内の動作主体にも意識主体にも見出されなかった。論理空間内の対象のひとつである動作主体は、一人称代名詞もしくは固有名詞によって指示される。一人称代名詞は特定の言語体系を身につけた者なら誰もが使用し得る道具であるから、一人称代名詞によって指示される動作主体は〈わたし〉ではない。また、固有名詞は客観的・三人称的な観点から人物を特定するものであり、三人称代名詞によって置換可能であるという意味で〈わたし〉を意味することはない。動作主体は論理空間の中で特別な位置を占めることがなく、他者と並ぶ存在なのである。一方、意識主体は、『論考』の枠組みの中で一人称代名詞によってすら指示されることがない。思考過程が捨象され、結果としての思考内容だけが存在するという考え方の中で、思考過程を担う意識主体は命題の論理分析において消去されてしまう。『論考』の中で〈わたし〉が示されるのは、形而上学的主体においてであった。形而上学的主体は、論理空間の存在論的前提として、そしてまた、生世界の存在論的前提として要請される。可能性の総体たる論理空間と、そして生と、限界を一致させる存在であり、隣人を持たない。このような形而上学的主体こそが独我論的主体であり、〈わたし〉を顕現している。

『論考』において〈わたし〉が以上のように論じられるのだとすると、この考え方で〈わたし〉の唯一絶対独我性を説明できているだろうか。つまり、〈わたし〉は唯一のものであること、隣人を持たず他と並ばない絶対的なものであること、そしてその唯一絶対の〈わたし〉はこの私にしか備わっていないこと、このような直観を説明できているだろうか。『論考』において他者に触れる部分はないが、他者が論理空間の内の動作主体となり得ることは確かである。しかしながら、論理空間自体に関してはどうだろうか。生と論理空間と形而上学的主体が一致しているのが『論考』の枠組みだが、「生」の唯一絶対独我性については読み取ることができても³、「論理空間」の唯一絶対独我性に関しては読み取ることができず、他者が他者の論理空間を持つことを否定し得ないように思われる。⁴つまり、『論考』では、形而上学的主体たる私の論理空間内に他者の論理空間を位置づけることはできないけれども、他者が自らの論理空間を開く可能性、つまり他者が他者の〈わたし〉を持つ可能性を理論的に否定し得ないように思われるのである。⁵もし他者が自らの論理空間を開き、別の〈わたし〉が存在するのだとすれば、〈わたし〉の唯一絶対独我性は『論考』において示し得ないだろう。他の論理空間を認めるということは、別の形而上学的主体の存在を要請することであり、別の〈わたし〉が示されるということだからである。論理空間や形而上学的主体の唯一絶対独我性がない限り、〈わたし〉は〈わたし〉足り得なくなってしまう。また、他者の論理空間を認めるのだとすれば、私の論理空間と他者の論理空間の普遍性は保証されるのか。仮に普遍性の根拠がない場合、意味はどうなるのだろうか。意味諒解に基づくコミュニケーションの成立可能性が脅かされることになりはしないか。このような理論的崩壊を避けるためには、『論考』において対象の論理形式の普遍性を「前提」せざるを得ないと思われるが、この「前提」には根拠があるのだろうか。

『論考』が持つこのような理論的緊張、崩壊に至る寸前で平衡を保っているような緊張にウィットゲンシュタインは気づいた。『論考』執筆後、ケンブリッジに戻ってきて哲学を再開したウィットゲンシュタインの中期第一期においては、〈わたし〉の唯一絶対独我性はどのように示されるか、および対象とその論理形式は理論的要請か、普遍性は必然的な前提か、このような問いかけと考察が展開される。筆者の読みでは、彼は中期第一期において『論考』の一部修正によりその延長線上に理論を発展

させていこうとするが失敗する。その失敗を承けて『論考』の枠組み全体を否定し乗り越える方向に向かっていく。本稿はこの線に沿い、彼の中期第一期における思想、〈わたし〉に関する考察を見るものである。

ウィトゲンシュタイン初期および中期の時期と資料

前稿でも述べた通り、本研究では手稿・タイプスクリプトまでテキストの範囲を広げ、より細分化された分類を行う。本稿が取り上げる中期第一期は、ウィトゲンシュタインがケンブリッジに戻ってから、後に『青色本・茶色本』としてまとめられる講義を展開するまでの時期、1929年から1930年の間を指す。中期第一期は、「論理形式について」、後に TS209、『哲学的考察』（以下『考察』と略記）にまとめられる MS105, 106, 107, 108, および MS109, 110, 111 までを執筆・考察した時期である。この第一期の原稿は、『考察』や『ウィトゲンシュタインとウィーン学団』として編集されている。

ウィトゲンシュタインが MS105 と後に名づけられる手稿を書き始めたのは 1929 年 2 月 2 日からである。翌 30 年のイースター休暇の間、4 月 24 日までの手稿 MS105 から MS111 までのおよそ半分の量を選んで口述筆記したものが TS208 である。TS208 は時系列に沿っている。その原稿はほぼすべてを、時系列順でなくトピック別に並べ替えたものが TS209 である。TS209 は、ウィトゲンシュタインの死後、『考察』として発行された。『考察』は邦訳にして付録を含めて 370 ページに及ぶ大著であり、この分量を見ても、1929 年 2 月から翌年 4 月までの短期間に、哲学を再開したウィトゲンシュタインが膨大な量の手稿を書き残したことがわかる。

ウィトゲンシュタイン中期第一期の伝記的事実

中期第一期は、1929 年 2 月から 1930 年 4 月までの一年余りの期間であり、哲学の問題を最終的に解決したと確信したはずのウィトゲンシュタインが、ブランクを経て哲学的考察を再開した時期にあたる。『論考』執筆後から中期第一期にかけての思想的展開は伝記的事実と関係が深いので、以下に関連する事項を略述することにする。⁶

ウィトゲンシュタインは 1920 年から 26 年までウィーン近郊の山村で小中学校教師を務め、26 年から 28 年までウィーンで姉の家（ストンボロウ邸）の設計と建築に携わった。この間、『論考』に関する考察、また新たな哲学的な考察を進めた手稿はないが、前期から中期にかけての重要人物と会った記録は残っている。1922 年 8 月 6 日にはラッセルがインスブルックへウィトゲンシュタインを訪ねてきている。この会見は、論理に関する議論をラッセルと行った最後の機会となる。それまでもラッセルの哲学や論理学を批判し、見解を異にしていたウィトゲンシュタインであるが、この会合以降、数理論理学から離れていく。⁷

1923 年 9 月には、フランク・ラムゼイがプーフベルクにいるウィトゲンシュタインを訪ねて来る。ラムゼイはケンブリッジの数学者、若くして数理論理学、哲学、経済学に多大な貢献をした天才である。年齢はウィトゲンシュタインより 14 歳下であり、この年ラムゼイは 20 歳、学士を取ったばかりであった。『論考』英訳の初稿を一人で作り上げたのは 18 歳から 19 歳にかけての 3 か月余りである。この面会はラムゼイが望んで実現した。ウィトゲンシュタインはラムゼイに『論考』を説明し、英訳の多くの個所を修正しただけでなく、ドイツ語原文も少し手直した。⁸ ラムゼイは翌 1924 年にもウ

ィトゲンシュタインを訪ねている。1925年8月、ケインズの経済的支援によりウィトゲンシュタインはイギリスを訪問し、エクルズ、ラムゼイ、ケインズ等に会っている。

1927年には、『論考』の著者との面会を切望していたもうひとりの人物、モーリッツ・シュリックと初めて会っている。シュリックはウィトゲンシュタインより7歳年長、マックス・プランクの下で物理学を学んだ後、哲学研究へと転向し、論理学・認識論・科学哲学等のテーマを研究した人である。彼は、かつてボルツマンやマッハが担当したウィーン大学の自然哲学に関する講義を1922年から担当しており、後にウィーン学団として知られることになるエルンスト・マッハ協会を主導していた。メンバーはカルナップ、ファイグル、ゲーデル、ノイラート、ワイスマン等である。シュリックの面会希望に対し、ウィトゲンシュタインは家の設計・建築に専念していて論理に関する問題に集中できる状態にないとし、姉を通じて面会を拒んでいたが、シュリックの熱意もあって実現した。その後、幾度かの会合を持ち、双方は理解し合うようになったという。ただし、初対面から意気投合したわけではなく、シュリックこそウィトゲンシュタインに魅了されたそうだが、ウィトゲンシュタインの方は理解し合えなかった印象を持ったようである。同年から28年にかけて週一回、シュリック、ワイスマン、カルナップ、ファイグル等と会合した。⁹

1928年3月10日、ワイスマンとファイグルに誘われ、ウィトゲンシュタインは直観主義数学者ブラウワーの講演を聞きに行く。ウィトゲンシュタインにとって気の進まなかったこの講演参加が彼を哲学に回帰させたことはよく知られている。講演後、『論考』とは異なる新しい見方、つまり直観主義的な見方をウィトゲンシュタインは興奮しながら数時間話し続けた。家の建築が同年11月10日に終わった後、ウィトゲンシュタインはすぐケインズに手紙を書き、できるだけ早く会いたい旨を伝える。この時、哲学研究再開の意図があったことは間違いない。ただ、健康上の理由があり、彼がケンブリッジを訪問できたのは1929年1月になってからであった。

1929年、この年がウィトゲンシュタインにとって大きな転機となる。ケインズの再びの招きによりケンブリッジを訪問したウィトゲンシュタインは、そのままケンブリッジに残り、哲学研究を再開することを決めた。Ph.D. 取得のためには一年間在籍不足とされたため、1月18日、トリニティカレッジの大学院に再入学、2月2日からノートに手稿を書き始めた。2月中旬までには研究計画も固まった。この研究計画には、視空間について研究する旨を記している。この頃、アリストテレス協会から寄稿を要請され、書き上げたのが「論理形式について」である。哲学研究再開後間もないウィトゲンシュタインは発表するに値する考えをまとめていないと自覚していた。「再び哲学するのが可能だと考えてケンブリッジに戻ったのであるが、しばらくすると彼の思想は枯渇し、いかなる考えも持ちあわせなくなった」¹⁰ というのである。それでも「このやり方から何かが生まれはしないかどうかためしてみよう」¹¹ と思い、依頼を受諾した。この論文は、ウィトゲンシュタイン自身が結局不出来であるとしてまったく価値を認めず、「駄目で特色のない出来栄え」¹² と自ら評したものとして知られている。ただ、彼が生前に自らの意志で発表したものとしてはこの論文が最後のものとなった。ケンブリッジが、第一次世界大戦前にウィトゲンシュタインが学んだ二年間をもって Ph.D. 取得に必要な課程を修了しているとみなしたことにより、一年間の在籍を終えぬうちにウィトゲンシュタインは『論考』を学位請求論文として提出し、6月、口頭試問を経て Ph.D. を取得した。ケンブリッジではラッセルやムーアとの議論よりむしろ、ラムゼイやスラッファ、ケインズとの議論が実り多かったようである。ウィトゲンシュタイン、ラムゼイ、スラッファ、ケインズの集まりはカフェテリアグル

ープと呼ばれ、ケインズやハイエクの理論等を論じていたとされている。

一方、ウィーンでは、同年9月にプラハで開催された国際会議でシュリックの友人たちが『科学的世界把握・ウィーン学団』¹³という小冊子を発行し、世に言うウィーン学団と論理実証主義の始まりを告げた。この小冊子の付録には、科学的世界把握の代表的指導者としてウィトゲンシュタインの名前があった。12月のクリスマス休暇にウィーンへ戻ったウィトゲンシュタインは、シュリックやワイスマンと会い、ケンブリッジで哲学研究を再開してからの研究成果を話した。彼らは年明けまで少なくとも六回会い、ワイスマンが速記した。¹⁴ この会合・討論は時にウィーン学団の他のメンバーを交え、時にシュリック抜きで1932年7月まで続く。ところが会合当初から、ウィトゲンシュタインの話はウィーン学団メンバーの思惑とは異なった。1931年11月からの手稿を見れば明らかなように、ウィトゲンシュタインの思想は後に中期第一期からさらに変化していったため、ウィーン学団のメンバーが期待するような、『論考』を発展させる討論とはならず、ウィトゲンシュタインの新しい思想を伝える場となった。ウィーン学団のメンバーの期待とウィトゲンシュタインの希望は重ならず、メンバーの当惑と比例するようにウィトゲンシュタインは用心深くなっていき、後にシュリックとワイスマン以外のメンバーとは会わなくなった。

『論考』の修正にかかる他者からの影響

中期第一期のウィトゲンシュタインの思想は、『論考』のいくつかの要点を修正しながらも、概観的には『論考』の思想圏に留まっている。ウィトゲンシュタインは独力で考察し修正したのではなく、他者からの指摘や他者との議論を通じて『論考』の部分的な誤りを自覚し、修正を余儀なくされたように思える。修正に寄与した重要な人物は、筆者の見るところ、ラムゼイとスラッファ、シュリックである。それぞれの影響について以下に見ていく。

ウィトゲンシュタインがラムゼイとスラッファとの議論をいかに重視していたかは、『哲学探究』の序文にうかがえる。

十六年前ふたたび哲学に従事するようになって以来、わたくしは、自分が最初の著書（筆者注：『論考』）の中で書き記しておいたことのうちに、重大な誤まりのあることを認めなくてはならなくなった。そうした誤謬を見ぬくの——わたくし自身ほとんど評価できないほど——役立ったのは、フランク・ラムゼイがわたくしの考えに対して下した批判であった。——かれの生涯の最後の二年間、わたくしは、かれと数えきれないくらい話し合い、自分の考えについて議論したのである。——かれの——常に強力での確な——批判にもまして、わたくしは、この大学（筆者注：ケンブリッジ大学）の教師であるP.スラッファ氏が、長年の間絶え間なくわたくしの思想について行なってくれた批判のおかげを蒙っている。こうした激励のおかげで、この手稿に現われる思想のうち最も実りゆたかな部分が生まれたのである。¹⁵

ラムゼイとスラッファとの議論が重要であった点、スラッファが鋭い知性の持ち主であり、『論考』の修正につながる批判的な指摘を行っていた点については、フォン・ウリクトの証言がある。

Of great importance in the origination of Wittgenstein's new ideas was the criticism to which his earlier views were subjected by two of his friends. One was Ramsey, whose premature death in 1930 was a heavy loss to contemporary thought. The other was Piero Sraffa, an Italian economist who had

come to Cambridge shortly before Wittgenstein returned there. It was above all Sraffa's acute and forceful criticism that compelled Wittgenstein to abandon his earlier views and set out upon new roads. He said that his discussions with Sraffa made him feel like a tree from which all branches had been cut.¹⁶

スラッファの批判がどのようなものであったか、その具体例であるひとつのエピソードをマルコムが以下のように伝えている。

Wittgenstein and P. Sraffa, a lecturer in economics at Cambridge, argued together a great deal over the ideas of the *Tractatus*. One day (they were reading, I think, on a train) when Wittgenstein was insisting that a proposition and that which it describes must have the same 'logical form', the same 'logical multiplicity', Sraffa made a gesture, familiar to Neapolitans as meaning something like disgust or contempt, of brushing the underneath of his chin with an outward sweep of the finger-tips of one hand. And he asked: 'What is the logical form of *that*?' Sraffa's example produced in Wittgenstein the feeling that there was an absurdity in insistence that a proposition and what it describes must have the same 'form'. This broke the hold on him of the conception that a proposition must literally be a 'picture' of the reality it describes.¹⁷

片手の指先で顎の下を外側に向けてスッと払う動作は、どのような命題で写像することができるのか、その命題はどのような論理形式を有し、どのような論理的多様性を持つと分析できるのか、その論理形式を広げる礎石となる対象は何なのか、また、反感や軽蔑といった意味は論理分析された命題のどこから生じて来るのか。これらの問いかけは『論考』に対する根本的な批判である。『論考』における対象と論理形式、論理空間の理論はこの批判的問いかけに答えられなければ崩壊してしまうだろう。実際に、ウィトゲンシュタインは1929年2月からの手稿において、『論考』における対象と論理形式、論理空間の考え方を修正し、新たに対象と文法形式、文法空間という概念を使って『論考』の枠組みを維持する方向に向かう。その新しい方向を見る前に、ラムゼイやシュリックとの議論が『論考』修正にいかに関与したかを確認しておく。

時間的に見れば、ラムゼイの『論考』批判はスラッファの指摘より先である。筆者が重視するのは、ラムゼイが1927年に記した論文の中で述べている以下の二点である。

一点目は、要素命題（原子命題ともいう）の相互独立と推論に関する論点である。『論考』によれば、すべての命題は要素命題の真理関数であり、要素命題は相互に独立している。よって、すべての推論はトートロジーに基づく。要素命題は相互に独立しているので、ある要素命題の真理値によって他の要素命題の真理値を推論することはできない。しかし、色を含む命題はどうだろうか。赤と青について、「これは赤でもあり青でもある」と論理積の形で語ることは矛盾である。この命題を分析すると、一見、「これは赤である」と「これは青である」のふたつの要素命題の論理積であるように思えるが、このように分析してしまうと、「これは赤である」と「これは青である」が共に真の場合、論理積の真理計算によって「これは赤でもあり青でもある」は真となってしまう。また、「これは赤である」から「これは青でない」が推論できてしまう。このような分析と推論は『論考』において許されない。ウィトゲンシュタインは『論考』において、要素命題の相互独立と推論についての考えを守った。そ

のため、「赤」や「青」は名でなくさらに分析が可能であり、視野の一地点の二色が同時に存在することは論理的に不可能であって矛盾であると考えた。¹⁸ それに対しラムゼイは、要素命題の真理可能性と論理積から見て、この不可能性を論理に求めることは難しいと示唆した。

(...) it might happen that some of the combinations of truth and falsity of his (筆者注: Wittgenstein's) atomic propositions were really self-contradictory. This has actually been supposed to be the case with "blue" and "red," and Leibniz and Wittgenstein have regarded "this is both blue and red" as being really self-contradictory, the contradiction being concealed by defective analysis. Whatever may be thought of this hypothesis, it seems to me that formal logic is not concerned with it, but presupposes that all the truth-possibilities of atomic sentences are really possible, or at least treats them as being so. No one could say that the inference from "this is red" to "this is not blue" was formally guaranteed like the syllogism.¹⁹

「論理形式について」においてウィトゲンシュタインは、ラムゼイの指摘を受け入れ、この不可能性は論理の問題ではない、つまり矛盾ではない、現実にはそのような事態が起こり得ないために論理積のひとつの真理関数が消去されねばならないのだと述べている。²⁰ 彼は、色の要素命題は独立変項のひとつの値についてだけ真の命題を生じ得る関数が存在するとする。これは『論考』から変わらない。²¹ けれども、「これは赤である」も「これは青である」も要素命題であり、色の名はそれ以上分析されないとする点は『論考』からの変更である。²² 「論理形式について」では、記号体系では論理積の記号を作ること許しているが、現実の側ではひとつの点にひとつの色を許す余地しかなく、記号体系は正しい像を与えていないのである。²³ 故に、「これは赤でもあり青でもある」は不可能な組み合わせとして消去されねばならず、この論理積は矛盾ではなく、無意味であるとする。無意味になってしまう理由は、要素命題が相互に独立していないからである。要素命題には相互に排除し合うものがあるという、『論考』からの修正がここにある。²⁴ そう考えないと、現実の可能性が持つ多様性より多くの論理的な多様性を命題が持つことになってしまうからである。²⁵ この考察は、いくらか不徹底である。「これは赤でもあり青でもある」が無意味であるという理由は、言語の側では論理積を作り得るけれども現実には対応する事実がないから、という理由と、要素命題の相互排除により言語の側で論理積を作ることが禁じられているから、という理由とが混在しているからである。ウィトゲンシュタインは後者の理由、『論考』にとってより打撃の大きい理由を採用し、その禁止が文法規則によってなされるのだ、と考えるに至った。中期第一期の手稿は、この点における『論考』の修正が数か月のうちに進むことを示している。現実における色の相互排除の問題、言語における要素命題の相互排除の問題は、いずれも等しく文法の問題なのだ、色は文法構造に従っており、その構造の中でひとつの位置を占めることは別の位置を占めないこと、また、ひとつの色はふたつの位置を同時に占めることがないこと等々は文法構造と形式によって決定され、文法命題に示されていると考えるようになったのである。

もう一点は、一般命題に関する反論としてラムゼイが挙げている論点である。『論考』に従えば、命題の一般形式は決定されており、要素命題に真理関数を適用したもの以外は疑似命題となる。対象が無限にあるかどうかは経験の問題、偶然の問題であるが、経験はそれを決定できない。²⁶ そのような枠組みで「すべて」を扱おうとすれば、もしも対象が有限であるなら連言の形で表示されるし、も

しも対象が無限であるなら、連言で示そうとすると無限の連言となってしまうのでその方法は採れず、「以下同様」という操作の反復適用を行うことによって示される、となる。²⁷しかし、このいずれもがラムゼイによって批判される。有限である場合、連言による表示に加えて「それらがすべてである」と付記せねば完全な像とならないが、『論考』ではその付記が疑似命題となってしまうので付記は認められない。『論考』において、連言のみで「すべて」を表示し得る、「それらがすべてである」と付記してはならない、と主張し得るのは、対象の属する集合のメンバーが有限であり枚挙可能であり、そのメンバーが何であるかに関する知識、つまりそれらがすべてであるという諒解が暗黙の裡に前提されているからではないのか。一方、対象が無限だとしたら、操作の反復適用を行う訳だが、その方法は命題同士の間にも内的関係を作り出してしまい、要素命題の相互独立性が保たれなくなってしまうのではないか。ウィットゲンシュタインは『論考』において、色は有限であり、数は無限であると考えたが、いずれの場合も、要素命題は内的関係を持ってしまうのではないか、そうでないと思えるのだとしたら、明示されていない暗黙の前提を密輸入してしまっているからではないのか、というのがラムゼイによる批判の骨子である。

The second objection that will be made is more serious; it will be said that this view of general propositions makes what things there are in the world not, as it really is, a contingent fact, but something presupposed by logic or at best a proposition of logic. Thus it will be urged that even if I could have a list of everything in the world “a,” “b,” ... “,” “for all x, fx” would still not be equivalent to “fa, fb... fz,” but rather to “fa, fb... fz and a, b... z are everything.” To this Mr. Wittgenstein would reply that “a, b... z are everything” is nonsense, and could not be written at all in his improved symbolism for identity. A proper discussion of this answer would involve the whole of his philosophy, and is, therefore, out of the question here; all that I propose to do is to retort with a *tu quoque*!²⁸

後にワイスマンによるウィーン学団との対話記録によると、1929年12月22日、25日、30日、1930年1月2日、5日にわたって、色、数、「すべて」、要素命題、推論等についてウィットゲンシュタインは語っており、ラムゼイの名前こそ出してはいないが、批判を受け入れて『論考』を修正している。²⁹その中では、要素命題が相互に独立していなくてはならないという考えが誤りであることを認めている。

私は、要素命題は相互に独立でなくてはならない、という表象を持っていた。完全な世界記述はいわば、或るものは肯定的であり、或るものは否定的であるところの全要素命題の積であるだろう、というのである。ここにおいて私は誤っていた。そしてしかもこの点に関しては、次の点が誤っているのである。それは、私は、論理定項の構文法的使用に関する規則、例えば「 $p \cdot q$ 」の規則、を確立した、しかし、この規則はそこに現われる命題の内部構造と何らかの係りがあり得る、という事に関して、考えていなかった、という事である。誤っていたのは、論理定項の構文法は、命題相互の内的関係について注目することなしに確立されるのだ、と私は信じていた、という事なのである。しかし事態はそうではない。私は例えば、同一の点が赤くかつ同時に青い、とは言えない。ここにおいては論理積は遂行不可能なのである。論理定項に関する規則はむしろ、包括的な構文法のほんの一部分を構成しているだけなのであり、当時私はその包括的な構文法について未だ何も知らなかったのである。³⁰

それに加えて、かつて彼自身予期しなかったことだが、不完全な像があることを認めた。³¹ これも、命題の像は完全であるとした『論考』の枠組みの修正である。³²

では、シュリックとの議論においてウィトゲンシュタインはどのような変化をしたのか。ウィーンにおいてウィトゲンシュタインが受けた教育の中にエルンスト・マッハの現象学があったことは十分に考えられる。マッハは世紀末ウィーンの象徴的存在のひとりだからであり、ウィトゲンシュタインはボルツマン、ヘルツといったウィーンの物理学者たちの思考に親しんでいたからである。とはいえ、1931年の手稿において彼が影響を受けた人物として名を挙げた人は、ボルツマン、ヘルツ、ショーペンハウエル、フレーゲ、ラッセル、クラウス、ロース、ワイニンガー、シュペングラー、スラッフアであり、マッハは含まれていない。³³ マッハの思想、中でも彼の物理学的現象学については、中期第一期の手稿に頻出する現象、現象学という語およびその言及頻度から見て、シュリックを経由して入ってきたと思われる。³⁴ マッハの物理学的現象学は、経験に由来しないという理由により実体概念や因果概念を形而上学的遺物であると断定し、物理学の課題は現象の関数によって記述されると考える。マッハは現象を特に感覚要素に限定し、背後過程を排除し³⁵、直接経験の構造が明らかになるような記述を求めた。

『考察』では、このようなマッハの考え方を取り入れた手稿が多く採用されている。重要なのは、「論理形式について」において「現象」という語が使われ、言語の正しい分析に到達するには現象そのものの論理的探究が必要、アポステリオリにのみ到達できる、としている点であり³⁶、また、『考察』において直接経験における過程を排除している点である。

ウィトゲンシュタインは中期第一期において、論理や論理空間よりは、直接経験や視空間についての言及が多くなる。³⁷ 直接経験や視空間の考察は現象学と呼ばれ、物理学と並置される。現象学は直接経験を直接的に描出する。そして、その経験を分析して得られるのは文法の構造と形式であり、現象と言語の本質を示している。故に、現象学は文法を探究する学問である。物理学的事実は直接経験を基にして記述されるので、現象学が一次的なものであるとされる。³⁸ つまり、「物理学は、諸法則を確定しようとする点で、現象学から区別される。現象学は諸可能性のみを確定する。そういう訳で、現象学は、物理学が自らの理論を構築するための土台としている諸事実を記述する文法である、ということになる。」³⁹ そして「マッハが思考実験と呼ぶものは、もとより何ら実験ではない。それは結局は文法的考察である」⁴⁰ とも書き残している。

シュリックとの相互影響をいうなら、これらの文はシュリックがフッサールの現象学を批判した論点を連想させる。直接経験が構造や形式を持つという主張はフッサールとシュリックに共通するが、フッサールが本質直観によってその構造を解き明かそうとするのに対し、シュリックは直接経験の構造は言語構造によって、つまり文法によって決まる、だから言語研究が欠かせないと、フッサールに論争を挑んだ。シュリックの考えはウィトゲンシュタインとの対話から生まれ、ウィトゲンシュタインも現象学は文法探究だという考え方をシュリック等との対話から練り上げていった。直接経験における可能性や不可能性は、ウィトゲンシュタインやシュリックによれば、現実の問題ではない。言語の文法や構造によって、あたかも現実の問題であるかのように考えてしまうのは誤りである。

ここまで、スラッフア、ラムゼイ、シュリックから受けた影響について見てきた。哲学再会までのこうした議論を通して中期第一期の存在論的枠組みが固まっていたのである。

中期第一期の存在論的枠組み

中期第一期は、命題は現実の像であるという『論考』の基本的原則は維持した上で、両者が論理空間内にあって論理形式を共有するという部分について、スラッフア、ラムゼイ、シュリックからの批判を通じて修正した。空間は、論理空間から視空間（現象の空間）⁴¹へと変わり、共有するものは論理形式から文法の構造と形式へと変更された。要素命題の相互独立も放棄された。いやむしろ、要素命題の相互排除の可能性を説明可能な枠組みとして、論理形式から文法構造と形式へと変更したと言ってもよい。

ウィトゲンシュタインは中期第一期においてその他の『論考』の存在論的枠組みは最小限の修正に留めて維持し得ると判断した、と筆者は考える。対象とその論理形式の存在を要請せず、論理形式の普遍性を前提せず、要素命題の相互独立性を放棄した上で、それでもその他の存在論的枠組みを変更せず、いわば「新」『論考』となるような修正だけに留めておく理論的枠組み、それが中期第一期の存在論的枠組みである。それを例証する中期第一期の文献的証拠も揃っている。中期第一期の存在論的枠組みはおおよそ以下の通りである。

人の経験は直接経験である。直接経験の主体は、まず現象学的現実において事実と出会い、現象学的な事実の世界を生きる。この世界において経験主体は現象学的対象と出会い、対象の対応物である名を通じて可能性の空間を開く。その可能性の空間が現象の空間、視空間である。⁴² 現象の空間は、生起し得る可能な事実のすべてを含んでいる。現象学的事実が現象の空間を超越することはあり得ない。

現象学的対象に対応する名は、現象学的言語の要素である。名の使い方は現象学的言語の文法規則によって定められる。文法規則は文法命題と呼ばれ、現象の空間の構造と限界を示すものでもある。⁴³ 限界は内側からのみ限界づけられることができ、意味と無意味との差異が限界を示す。現象の空間を記述する命題は意味のある命題であり、無意味な命題は空間内のいずれの可能性とも対応していない。現象の空間に対応する現象学的言語は、日常言語ではない。私たちに与えられているのは日常言語であるが、日常言語を分析して文法形式が顕かになった命題が現象学的言語を構成する。

現象の空間の構造と限界が現象学的言語の文法を通して示されるひとつの例として、色八面体が挙げられる。⁴⁴ 色八面体は、八面体の中央四頂点にひとつずつ原色（赤・黄・青・緑）をあて、錐点に白と黒をあてるものであり、基本色と混合色があるという色の構造や、ひとつの場所はひとつの色しか占めない等といった規則（限界）を示す。⁴⁵ この構造と限界は、日常言語からは見て取ることができず、分析して文法構造と形式を明確にしないと見えてこない。⁴⁶

現象の空間と現象学的言語は、文法構造と形式を共有し、同じだけの論理的多様性を持つ。⁴⁷ 文法形式が『論考』の論理形式に取って代わった機能を果たしている。⁴⁸ 文法は、要素命題の一般構造のような、唯一の形式を想定するものでなく、名のクラスごとに異なる主語述語形式を容認するものであり、クラスの異なる名を相互に入れ換えると無意味な命題が生じる。同じ文法に属する語であれば、相互に入れ換えても無意味な命題は生み出さないが、異なる文法に属する語を相互に入れ換えると無意味な命題が生まれる。これが規則であり、限界である。

物理学は、現象学的現実における直接経験の記述を基に構成される。現象学的現実が一次的であり、物理学の世界は二次的である。後者は構成され客観化された世界であり⁴⁹、時間的には過去や未来を持つ。物理学の言語は、日常言語ではなく、分析された言語であるが、現象学的言語を基に構成される。現象学的言語が一次的であり、物理学の言語が二次的となる。現象学的現実には過去や未来はな

く、現在しかないし、直接経験の主体は私だけである。否、正確に言えば、現象学的「現在」にも直接経験の主体たる「私」にも隣人がいないため、隣人がいることを前提とした日常言語の「現在」や「私」という語をあてることはできない。その一方、物理学的世界においては、現在は過去や未来と接しており、私は他の人と並んでいる。現象学的言語には時制も人称もないが、物理学的语言には時制も人称もある。日常言語は、過去や現在、未来という語と概念を持ち、人称代名詞を備えているので、物理学的世界にあるといえる。⁵⁰

現象の対象は経験において偶然出合うものであるのに対し、現象の空間はアプリオリであり無時間的である。⁵¹ たとえば、赤という色がどのようなものであるかを知るためには経験が必要だが、色の空間自体は経験から独立しており、時間によって変化するものではない。

文法構造と形式もまたアプリオリであり無時間的である。⁵² 現象の空間の本質と限界は、真偽のいずれの値をもとり得る真正な命題ではなく、言語使用の規範・規則として働く文法命題によって示される、と先に述べた。文法命題は、アプリオリかつ無時間的な空間の本質を示すわけだから、恒真でなければならない、疑似命題なのである。また、現象学的現実における直接経験は否定することが意味を持たないので⁵³、文法命題は直接経験の内容も示し得る。つまり、文法規則は、言語の側から見れば名の用法に関わる規則であり、現象の空間の側から見れば空間の本質と限界を示す機能と直接経験の内容を示す機能とを果たすのである。⁵⁴ ただし、混乱を招きやすいので注意が必要だが、直接経験の内容を示す命題の中には、他の可能性もあり得るがそれしか起こらないという現実の経験を記述する一般的な諸命題もある。⁵⁵ 哲学は「文法の管理人」⁵⁶ として両者の区別もなさねばならない。

現象の空間と文法は、構造と形式を共有するとされる。この共有は、どのように保証されるのだろうか。中期第一期では、両者をつなぐものは志向性である。ウィトゲンシュタインは、命題を事実にあてがうことを志向性と呼び、志向性に基づいて両者は構造と形式を共有しているとされる。⁵⁷

可能性の総体としての現象の空間は、その外に出ることができない。そのような空間とぴったり一致しているのが生であり、生は形而上学的主体を要請する。現象の空間と生、形而上学的主体は一致する。故に、形而上学的主体は隣人を持たないし、空間の所有者であるとは言えない。⁵⁸

形而上学的主体も、経験主体も、隣人を持たないが故に、日常言語で語ることは望ましくない。両者の隣人のなさ、超時間性、超人称性は、隣人を持つ日常言語で表現し得ないのである。表現し得ないのに、「現在」や「私」という語を現象学的言語に取り入れて語ってしまうことによって哲学的な誤りが生じる。⁵⁹ それ故、ウィトゲンシュタインは、「視空間の現象それ自身を孤立して描出することが可能な表現形式を我々が必要としていることも明らかである」⁶⁰ と言い、視空間、つまり現象の空間の本質を示し得る現象学的言語の表現形式を追究したのである。⁶¹ 哲学は文法の管理人として無意味な命題を排除することで世界の本質を把握することに寄与するのであるから⁶²、哲学者は「現在」や「私」を使わない現象学的言語を考え出さねばならない。『考察』には次のように述べられている。長くなるが引用する。

現在の経験のみが実在性を持つ、と言われる時、他の結合で登場する「私」という語と同様に、ここでは「現在」という語が余計であるに相違ない。というのもそれは、過去や未来と対比された現在を意味することとはありえないからである。その語によって意味されているのは別なこと、即ち空間内にあるものではなく空間それ自身、に相違ない。即ち、それは他のものに対して限界を接する（したがって他のものによって

限界づけられうる) ものではない。従ってそれは言語によって正当に際立たせることの不可能なものである。

ここで話されている現在とは、映写機のレンズの位置に丁度今あるフィルムの帯の像のことではない。——この像はそれの前後にあり既にそれ以前にレンズの位置にあったかあるいはまだレンズの位置にきていないその他の像と対比される。そうではなく今問題となっているのはスクリーン上の像であり、それは不当にも現在と呼ばれているのである。というのもここでは「現在」は過去・未来と相違するものとして使用されてはいないからであり、従ってそれは意味のない修飾語なのである。⁶³

「私」という語に関しても次のように書いている。

「私」という語の使用、とりわけこの語が「私は赤い斑点を見る」といった直接体験の描出にあらわれる折の使用は、我々の言語の描出方法の中で最も誤解を生じやすいものの一つである。(中略) 我々の全ての語り方は普通の物理的言語から取られている。それは認識論や現象学では対象に歪んだ光を投じることなしには使用不可能である。

「私は x を知覚する」というこれだけの語り方にしても、既に物理的表現方法からとられており、ここでの x は物理的対象—例えば物体—のはずである。この語り方を x が生のままのデータを意味せねばならない現象学で使用するのが既に誤りである。というのもいまや「私」も「知覚する」も初めと同じ意義を持つことが不可能であるから。⁶⁴

では、「私」を使わない現象学的言語はどのようなものになるのであろうか。ウィットゲンシュタインは、「人称代名詞の助けをかりずに描出する他の表現方法」⁶⁵を提案する。

次のような描出の仕方の採用は可能であろう。即ち、私、ルートウィヒ・ウィットゲンシュタイン (L.W.) が歯痛を持つ場合、このことは「歯痛が存在する」という命題によって表現される。しかし「A が歯痛を持つ」という命題で今日表現されることが実情である場合には、「A は、歯痛が存在する場合の L.W. と同じように振舞う」と言われる。これと類比的に「思考が行われる」とか「A は、思考が行われる場合の L.W. と同じように振舞う」とも言われる。⁶⁶

本論の研究目的である主観性に関して見れば、『論考』の三種の主体はほとんど修正されずに存在論的枠組みの中に残された。動作主体は、物理学の世界において物理学的言語によって捉えられる。故に動作主体は隣人を持つ主体であり、一人称は「私」もしくは固有名詞によって指示され得る。動作主体は他者と同等である。次に、思考し表象する主体は、直接経験の主体と置き換えられる。直接経験の主体は、自分が直接経験の中心であり、自分の身体から経験を開くものであり、空間内のある場所に存在しているが⁶⁷、直接経験の記述において背後過程は捨象され、その内容だけが問われる。こうして直接経験の主体は現象の空間から消え去る。だからこそ、現象学的言語においては「私」を使わない表現形式が提案されたのである。最後に残った形而上学的主体は、生と空間によって要請され、生と空間と一致する主体として、そのまま残された。中期第一期では、〈わたし〉は、言語化され得ない経験主体と形而上学的主体に示されるとウィットゲンシュタインは考えたのである。

中期第一期の緊張

ただし、中期第一期の存在論的枠組みは安定的ではなかった。以下の三点において問題を抱えてい

るからである。

一点目は、文法についてである。文法に関しては三点の疑問が持ち上がる。

・ひとつめは、文法形式の妥当性と普遍性についてである。文法構造と形式が経験的でなくア priori であるということは、一種の理論的要請であり、その普遍性も前提されている。しかし、それならば、論理形式が抱えた問題は解決されないのではないだろうか。たとえば、スラッファが指摘したような、顎の下を撫でる動作は、どのような対象を持ち、どのような名や命題で写し取られ、どのような文法形式を有するのだろうか。また、そのような文法形式が、言語や文化に相対的でなく普遍的だという主張は何によって保証されるのだろうか。これらの問題に対してウィトゲンシュタインは、中期の間は文法という考えを維持して修正すべく努めたが、その後断念し、新たに言語ゲームという概念を創り出した。

・ふたつめは、対象概念についてである。中期第一期において、色や数、音といった例を対象として考察していたウィトゲンシュタインであるが、同時期に考察した痛みは対象と呼べるのか。知覚対象、感覚対象と私たちは語ってしまうが、これらは単純で分割できない対象なのだろうか。彼は、これらは対象ではないと後に結論づける。後期の代表的著作である『哲学探究』を紐解けば、色や痛みの考察が展開され、それらが対象ではないという主張を見て取ることができる。

・もうひとつは、命題に関する問題である。まず、「これは赤い」や「ここが痛い」という命題を使用するとき、命題を真とする根拠は何か。現実の対象が色のサンプルや痛みの標本と一致しているというのか、それとも過去の記憶像と一致しているというのか。⁶⁸ 次に、「これは赤い」や「ここが痛い」という現象学的言語は、どのようにして身につけるのか。言語を身につけるということは、自分でことばを創り出すわけではなく、周囲の人たちが語ることばを覚えるということだが、直接経験の内容を示すとされる現象学的言語をどのように身につけることができるのか。⁶⁹ この点に関しても、文法から言語ゲームへという変化の中で問題解決を図っていったように見える。

二点目は、意味の問題である。日常言語における痛みの表現形式を使って考えると哲学的問題を生じるとウィトゲンシュタインは考えたわけだが、いったん日常言語の表現を使ってみよう。「私は歯が痛い」と「彼女は歯が痛い」という文である。前者は「痛みを感じている人」が話し手となって痛みを表出している文である。一方、後者は「痛みを感じている人」が話し手であるわけではない。それ故、ウィトゲンシュタインは、痛みについて現象学的言語を提案し、前者を「歯痛がある」といい、後者を「彼女は、歯痛がある時の L.W. と同じように振舞う」というように変えたのである。前者は人称を消去した表現方法であり、後者は徹底して客観的視点に立った表現方法である。ウィトゲンシュタインは、中期第一期において意味は検証方法だとする考えを持っていたが、このような表現方法をとった場合、前者は歯痛が存在するかないかの問題、後者は振舞いが客観的に観察できるかどうかの問題であるから、「痛い」という語の意味が両方で異なってしまう。彼は、当初、痛みに関しては直接検証と外的検証との違いを探っていたが、後に検証の不可能性と外的検証との違いであることに気づく。そして、検証が不可能であるということは、意味の検証理論を保持できないということである。後期には、意味は使用であるという主張へと変化していくことになる。

三点目は、直接経験の主体を消去する現象学的言語と〈わたし〉との関係についてである。ウィトゲンシュタインは、現象学的言語は、経験主体が隣人を持たないことを「語る」のではなく「示す」ことができると考えた。しかし、現象学的言語には不十分な点がある。それは、先の引用部分にも表

れているのだが、直接経験については人称を使わない表現方法を用いているものの、他者の痛みについては徹底して客観的描写、つまり三人称的観点を密輸入し固有名詞もしくは三人称代名詞を使っている。現象学的言語に人称が存在しないのであれば、それは、現象学的言語に物理学的言語を導入してしまっていることを意味する。そして、それ以上の困難は、現象学的言語は誰もが自分を中心として語ることができるという点にある。『論考』において沈潜していた問題、他者が論理空間を開くことができる、他者も＜わたし＞を持つことができ、＜わたし＞の本当の意味を示すことができないという問題が、より明確な形で顕現してしまったのである。この点についてウィトゲンシュタインは自覚し、次のように書き留めている。「この言語（筆者注：「私」を使わない言語）が任意のいずれの人をも中心としてとりうることも、同様に明らかである。」⁷⁰ では、＜わたし＞はどのように示されるのか。ウィトゲンシュタインは、中期第一期において、誰もが現象学的言語を持つことができるとはいえ、＜わたし＞はこの言語において示されていると信じた。それはその唯一絶対独我性を「語る」ことによってではなく、言語を「適用する」ことによって示されるのだと考えた。

ところで、種々の人間を中心としてとり、かつ私が理解する全ての言語の中で、私を中心とする言語は特別な位置を占めている。この言語はとりわけ適切である。私はこのことをいかに表現できるであろうか。即ち、私はこの優位性をいかに正しく言葉で描出できるであろうか。それは不可能なことである。（中略）というのを私を中心とする言語でこのことを行おうとすれば、この言語に固有な用語でこの言語を記述すれば例外的な位置が与えられることは何ら驚くべきことではないし、また他の言語の表現様式では私の言語は決して特別な位置を占めないからである。——特別な位置は適用に存しているのである。⁷¹

現象学的言語と文法を見る限りにおいては、私が使うものも他者が使うものも権利上平等であり、特別さを「語る」ことはできず、「適用」によって示される。特別な位置は適用にあるとはどのような意味か。現象学的言語は、誰が話者であるかが重要である。発話されたり書かれたりするとき、つまり生活の中の活動において使われるとき、動作主体として一人称代名詞と固有名詞の両方で指示され得る人たちの中から、経験主体として一人称代名詞を使い得ない人がたった一人だけ存在する。それが誰かは、現象学言語を使う話者によって特定される。その時、現象学的言語の特別な位置が顕現する、とウィトゲンシュタインは考えたのである。

しかし、この考え方もまた、複数の現象学的言語が存在し、使用され得ることを否定しておらず、適用においても＜わたし＞は示し得ないことを明らかにしてしまっているように筆者には思える。なぜなら、文法空間を内側からしか限界づけることができないとすればウィトゲンシュタインは正しいが⁷²、その条件付けが絶対的に正しいとは思えないからである。確かに、生や現象の空間の外に出ることは不可能であろう。けれども、「世界はふたつの見方ができる」⁷³、「言語は現実の像である」⁷⁴、「言語の限界は可能性の空間の限界と一致する」、「他人も私と同じように言語を使用する」⁷⁵という大前提に対して懐疑的になるならば、言語をもって言語を語ることが可能となり、言語の複数性・多階層性を認めることができるからである。実際に、ウィトゲンシュタインは、中期から後期へかけてその方向へ進んでいく。

何がきっかけになったか。そのひとつの証拠は、先に見たように「命題は現実の像である」という考え方の修正である。1929年12月18日に開かれたシュリックとワイスマンとの会合においてウィトゲンシュタインは、「要素命題の不完全な像」という考え方を提示している。中期第一期において、

像概念の崩壊が始まっている。

そして、より一層重要だと筆者が考えるのは、この日の会合における現象学的言語についての記録である。ウィトゲンシュタインは間違いなく次のような考えを説明したはずである（先に引用済）。

即ち、私、ルートウィヒ・ウィトゲンシュタイン (L.W.) が歯痛を持つ場合、このことは「歯痛が存在する」という命題によって表現される。しかし「A が歯痛を持つ」という命題で今日表現されることが実情である場合には、「A は、歯痛が存在する場合の L.W. と同じように振舞う」と言われる。これと類比的に「思考が行われる」とか「A は、思考が行われる場合の L.W. と同じように振舞う」とも言われる。⁷⁶

しかし、ワイスマンの記録には次のように残されている。

私が歯が痛いときには私は、ウィトゲンシュタインは歯が痛い、と言うであろう。しかしヴァイスマンが歯が痛いときには、ヴァイスマンはウィトゲンシュタインのように振舞う、と言うのである。これに対しあなたが中心である言語においては、全く逆のことが言われるであろう。即ち、ヴァイスマンが歯が痛いときには、ヴァイスマンは歯が痛い、と言い、ウィトゲンシュタインが歯が痛いときには、ウィトゲンシュタインはヴァイスマンのように振舞う、と言われるであろう。（中略）

もし私が「A」であれば、私は勿論、「もし B が痛みを感じれば、B は A のように振舞う。」と言える。しかしまた、「もし A が痛みを感じれば、A は B のように振舞う」とも言えるのである。このような言語の中の一つ、即ち私が中心であるような言語、が特別扱いされるのである。この言語の特別な位置は、その使用にある。それは、表現されないのである。⁷⁷

ワイスマンは、「私が中心であるような言語」が特別扱いされるという主張をどのように整合的に理解したのであろうか。彼は「私が中心である言語が特別扱いされること」「この言語の特別な位置」という意味をまったく理解しなかったのではないだろうか。彼が書き留めた記録において、「私」を消去した現象学的言語についてのウィトゲンシュタインの話が、固有名詞によって話者を指示する客観的な言語、物理学的言語による説明に変わってしまっているのである。ウィーン学団は世界の科学的把握を標榜する集団であるから、ウィトゲンシュタインが伝えようとした現象学における＜わたし＞の特異性について、ワイスマンが理解し得ず、その話を客観的な物理学の観点から理解しようとしたとしても無理はない。

記録を見る限り、ワイスマンは理解できなかった。客観的な物理学の観点から＜わたし＞を理解することなどできないのである。それ故、ワイスマンは記録の中に、ウィトゲンシュタインを中心とする言語もワイスマンを中心とする言語も「これら全ての言語は、相互に翻訳せられる」⁷⁸と書いた。これは決定的な無理解である。＜わたし＞を示すための現象学的言語は、物理学的言語に翻訳することはできないし、他の人の現象学的言語にも翻訳不可能でなければならない。ウィトゲンシュタインが語ったと思われることばは、「この表現形式（筆者注：一人称代名詞を使わない表現形式）も、一義性と諒解可能性に関しては、明らかに我々の言語と等価値である」⁷⁹であり、「適用を度外視すれば全ての言語は等価値である」⁸⁰だったのであるから。

けれども、この無理解はウィトゲンシュタインを驚かせ、悩ませたと思われる。＜わたし＞を示す現象学的言語によって表現される現象学的世界は、物理学的言語でも記述可能なのか。直接経験の主体を消去することでその特別さを示そうとする現象学的言語は、固有名詞を使った物理学的言語、全

員を三人称的観点から記述する客観的な言語で置き換えられてしまうのか。隣人のなさを徹底した言語は、隣人を持つよう徹底した言語と一致してしまうのか、と。そしてそれは、かつて『論考』で述べた、徹底した独我論は純粋な実在論と一致するという事と同じである、と。⁸¹

中期第一期の問題点に気づいたウィットゲンシュタインはすぐに新たな考察を始めた。直接経験、現象学的言語というアイディアに関し、中期第一期が終わる頃までにその考えを断念し、こう書いている。「現象学的言語、あるいは——私がかつて名付けた言い方によれば——「第一次的言語」は、今の私には目標とは思われない。もはや今の私はそれを必要とも思わない。」⁸² 現象学的言語は、適用においても＜わたし＞を特権化することはできない。故に、現象学的言語は放棄される。

現象学的言語の放棄は、内と外の放棄でもある。直接経験が外の動作を支えている、直接経験の主体が一次的で動作主体は二次的であるのではなく、外の動作を支えているのは言語であるからである。たとえば、「考える」という語を使えるのは、その動作に直接経験（内的経験）のような背後過程が伴っているからではない。オウムが「考える」といえないのは、その動作に直接経験が伴っていないからではなく、オウムが「考える」という語が属する言語の体系を持っていないからであり、「考える」という語を使う言語ゲームに参加していないから、である。別の例を挙げれば、「痛い」という語を使えるのは、その知覚感覚に痛みという内的経験が伴っているからではなく、「痛い」という語の体系を知っているからであり、「痛い」という語を使う言語ゲームに参加できるから、である。ウィットゲンシュタインは、中期第二期においてその理由を、言語の体系を持っていないからとみなし、後期において、言語ゲームに参加していないからとみなした。言語を自律的な言語体系とみなす方向から、言語を生活に埋め込まれた活動とみなす方向へ。それが中期第二期の言語論、そして後期の言語ゲーム論である。そこで＜わたし＞がどのように扱われるのかについては次稿以降に措くこととする。

註

- 1 原文は英文。Wittgenstein (1993) pp.228-9。邦訳は入不二 (2006) p.76 を借用した。
- 2 井原奉明 (2018) 「ウィットゲンシュタイン哲学における主体について (1)」『学苑・英語コミュニケーション 紀要』 No.930 pp.50-64
- 3 『ウィットゲンシュタイン全集1 論理哲学論考 草稿1916-1918 論理形式について』(以下『全集1』と略記) 1916年8月1日 p.265 参照
- 4 『論理哲学論考』(以下『論考』と略記) において「私の言語」と述べられているということは、他者の言語、他者の論理空間があり得ることを示唆する。
- 5 そのような論理空間は、私の論理空間内に位置づけられないが故に私にとって理解不能である。
- 6 伝記的事実に関しては『ウィットゲンシュタイン全集5 ウィットゲンシュタインとウィーン学団 倫理学講話』(以下『全集5』と略記) に収められた編集者のまえがきに依拠する。『全集5』pp.13-42 参照。また、一部の事実は『ウィットゲンシュタイン小事典』に拠る。
- 7 もちろんこの後もラッセルと議論をする機会はあった。『論考』をもって Ph.D. 請求論文とした審査官はラッセルであり、1929年6月には口頭試問が行われている。1930年3月、ラッセルは三日間かけてウィットゲンシュタインから中期第一期の新しい考えを聞いたが理解できなかった。
- 8 『論考』が草稿から何段階も経て作り上げられ、完成度が高い書であったことを思えば、原文に修正が入ったこと自体驚きである。とはいえこの修正は『論考』の思想に変化をもたらすものではない。
- 9 この会合は月曜に行われた。ただしこの記録は残っていない。この頃、ウィーン学団が定期的に会っていたのは木曜であり、後にウィットゲンシュタインを招いてウィーン学団メンバーが会合したのも木曜である。

- 10 『全集 1』 p.361
- 11 『全集 1』 p.361
- 12 『全集 1』 p.362
- 13 原題は *Wissenschaftliche Weltauffassung Der Wiener Kreis* である。
- 14 この記録が *Ludwig Wittgenstein und der Wiener Kreis* として 1967 年に刊行された。
- 15 『ウィトゲンシュタイン全集 8 哲学探究』序文 p.11。ラムゼイは 1930 年 1 月、26 歳で急逝した。
- 16 von Wright p.28
- 17 Malcom (1958) pp.57-8
- 18 『論考』 6.3751 参照。
- 19 Ramsey p.11。この引用部に続く一般命題に関する論述の中でラムゼイは、自らの考えによって、すべての推論はトートロジーに基づくというウィトゲンシュタインの考え、すなわち『論考』の考えを拡張し得ることを主張している。
- 20 『全集 1』 pp.367-9 参照。ウィトゲンシュタインは、「相互に排除しあう」と「相互に矛盾する」とは異なる」と述べ、原子命題同士は相互に矛盾し得ないが排除し得る、という考えを展開している。
- 21 色、空間、時間は対象の形式で、それぞれ現実にはひとつの時点・場所に置いてひとつの値しか取らない。しかし、これは理論的要請であろう。『論考』 2.0251 参照。
- 22 『論考』 6.3751 参照。
- 23 『全集 1』 p.268 参照。
- 24 『ウィトゲンシュタイン全集 2 哲学的考察』（以下『考察』と略記）第 83-4 節 pp.137-9 参照。
- 25 『全集 1』 p.269 参照。
- 26 『論考』の対象が有限か無限かは実は論者によって意見が分かれるが、ここではこれ以上触れない。
- 27 『論考』 5.2523 および『草稿』1916 年 11 月 21 日参照。
- 28 Ramsey p.13
- 29 『全集 5 ウィトゲンシュタインとウィーン学団 倫理学講話』pp.51-135 参照。
- 30 『全集 5』1930 年 1 月 2 日 pp.105-6
- 31 『全集 5』1929 年 12 月 22 日 p.51 参照。
- 32 『論考』 5.156 参照。
- 33 *Culture and Value* p.19
- 34 ただし、1929 年の手稿に出てくる現象、現象学は『論考』にまで遡及できるのだという論者もいる。筆者は、それらの語の意味・用法、頻度から見て、『論考』には遡及できないと考える。
- 35 過程の排除は『論考』の思考における考え方にも見られたことを想起されたい。
- 36 『全集 1』 p.363 参照。
- 37 それ以外、数学についての言及も多いが本論とは関係がないので措いておく。
- 38 『考察』第 1 節 参照。
- 39 『考察』第 1 節 p.52
- 40 『考察』第 1 節 p.52
- 41 ウィトゲンシュタインは「視空間」という語を使うが、「現象の空間」という方が適切であろう。本稿では時に「現象の空間」と置き換えて使う。
- 42 『考察』第 1 節 p.52 参照。
- 43 『考察』第 54 節 pp.99-100 参照。
- 44 『考察』第 39 節 p.84 参照。
- 45 『考察』第 78 節 p.132 および第 221-2 節 pp.375-80 参照。
- 46 『考察』第 1 節 p.52 参照。
- 47 『考察』第 13 節 p.61 参照。

- 48 『考察』第1節 p.51 参照。
- 49 『考察』第71節 p.120 参照。
- 50 私たちも、記憶と予期を持ち、他者と共に世界を生きるとみなせば、日常言語同様、物理学的世界に
いる。『考察』第70節 p.118 参照。
- 51 『考察』第1節 p.52 および第69節 p.118 参照。
- 52 『考察』第1節 p.52 参照。
- 53 『考察』第74節 p.124 参照。
- 54 どちらの機能を果たす場合でも、文法命題は、否定することができないという意味で真正な命題ではない。
- 55 『考察』第55節 pp.100-1 参照。
- 56 『考察』第54節 p.99
- 57 中期第一期では、「志向性」が論理形式の共有にとって代わって言語と実在とを結びつける働きをするので
ある。『考察』第20節 p.67 参照。
- 58 『考察』第71節 p.120 および第73節 pp.123-4 参照。
- 59 『考察』第57節 p.104 参照。
- 60 『考察』第70節 p.119
- 61 『考察』第1節 p.51 参照。
- 62 『考察』第54節 pp.99-100 参照。ちなみにこの論点は『論考』と共通である。
- 63 『考察』第54節 p.100
- 64 『考察』第57節 pp.104-5
- 65 『考察』第57節 p.104
- 66 『考察』第58節 p.105
- 67 『考察』第55節 pp.100-1 参照。
- 68 『考察』第12~38節 pp.60-83 参照。
- 69 『考察』第2節 pp.53-4 参照。ウィトゲンシュタインが、子供がことばを学ぶ視点を披露しているのはこ
の箇所が初めてである。その他、第5節、6節、23節でも「学ぶ」「教える」「習得する」に関する記述が見
られる。
- 70 『考察』第58節 p.105
- 71 『考察』第58節 pp.105-6
- 72 『考察』第6節、7節には、言語をもって言語の外に出ることはできない、言語によって可能性の外に出る
ことは不可能であるという考えが述べられている。
- 73 ショーペンハウエルに基づく考え方で、『草稿 1914-1916』『論考』から基本的な骨格として受け継がれて
きた。
- 74 このままの文ではないが同様の主旨については『考察』第10節 p.59 参照。
- 75 『考察』第7節 p.57
- 76 『考察』第58節 p.105
- 77 『全集 5』1929年12月18日 p.67
- 78 『全集 5』1929年12月18日 p.67
- 79 『考察』第57節 p.105
- 80 『考察』第57節 p.106
- 81 『論考』5.64 参照。
- 82 『考察』第1節 p.51 『考察』は時系列順に書かれた手稿をテーマ別に並び替えたものである点に留意され
たい。

参考文献

本文中に言及したウィットゲンシュタインの書誌情報に関しては以下の通りである。引用や参照が邦訳書名の場合は、以下の邦訳文献に依拠する。

- Wittgenstein, Ludwig (1922) *Tractatus Logico-Philosophicus*. C. K. Ogden (ed.) C. K. Ogden and F. P. Ramsey (trs.) International Library of Philosophy and Scientific Method Kegan Paul, Trench, Trubner
『論理哲学論考』野矢茂樹訳 岩波文庫青 689-1 岩波書店 2003 年
- Wittgenstein, Ludwig (1929) “Some Remarks on Logical Form” *Proceedings of the Aristotelian Society, Supplementary Volume IX*, pp. 162-171 『ウィットゲンシュタイン全集 1 論理哲学論考 草稿 1916-1918 論理形式について』奥雅博訳 大修館書店 1975 年 pp. 359-370
- Wittgenstein, Ludwig (1953) *Philosophische Untersuchungen*. G. E. M. Anscombe and R. Rhees (eds.) G. E. M. Anscombe (tr.) Basil Blackwell 『ウィットゲンシュタイン全集 8 哲学探究』藤本隆志訳 大修館書店 1976 年
- Wittgenstein, Ludwig (1958) *Preliminary Studies for the “Philosophical Investigations”. Generally Known as The Blue and Brown Books* Basil Blackwell 『ウィットゲンシュタイン全集 6 青色本・茶色本 「個人的経験」および「感覚与件」について フレーザー「金枝篇」について』大森荘蔵・杖下隆英訳 大修館書店 1975 年 pp.1-298
- Wittgenstein, Ludwig (1961) *Notebooks 1914-16* G. H. von Wright and G. E. M. Anscombe (eds.) G. E. M. Anscombe (tr.) Blackwell 『ウィットゲンシュタイン全集 1 論理哲学論考 草稿 1916-1918 論理形式について』奥雅博訳 大修館書店 1975 年 pp. 121-358
- Wittgenstein, Ludwig (1964) *Philosophische Bemerkungen*. Rush Rhees Basil (ed.) Blackwell 『ウィットゲンシュタイン全集 2 哲学的考察』奥雅博訳 大修館書店 1978 年
- Wittgenstein, Ludwig (1967) *Ludwig Wittgenstein und der Wiener Kreis*. B. McGuinness (ed.) Basil Blackwell 『ウィットゲンシュタイン全集 5 ウィットゲンシュタインとウィーン学団 倫理学講話』黒崎宏・杖下隆英訳 大修館書店 1979 年 pp.1-378
- Wittgenstein, Ludwig (1980) *Culture and Value* G. H. Von Wright (ed.) P. Winch (tr.) University of Chicago Press
- Wittgenstein, Ludwig (1993) *Philosophical Occasions 1912-1951* J. Klagge and A. Nordmann (eds.) Hackett Publishing Company
- 飯田隆 (2005) 『ウィットゲンシュタイン 言語の限界』講談社
- 入不二基義 (2006) 『ウィットゲンシュタイン 「私」は消去できるか』NHK 出版
- 鬼界彰夫 (2003) 『ウィットゲンシュタインはこう考えた』講談社現代新書 1675 講談社
- 林大悟 (2016) 「直接経験の記述による本質の把握—『哲学的考察』の現象学的言語」『これからのウィットゲンシュタイン—刷新と応用のための 14 篇』荒畑靖宏・山田圭一・古田徹也編著 リベルタス出版 pp. 70-84
- 山本信・黒崎宏編 (1987) 『ウィットゲンシュタイン小事典』大修館書店
- ショーペンハウエル (1971) 『意志と表象としての世界 (Ⅱ)』磯部忠正訳 理想社
- Glock, Hans-Johann (1996) *A Wittgenstein Dictionary* Blackwell Publishers Ltd.
- Glock, Hans-Johann (2001) *Wittgenstein A Critical Reader* Blackwell Publishers Ltd.
- Hacker, P.M.S. (1975) *Insight and Illusion* Clarendon P.
- Hintikka, Merrill B. and Hintikka, Jaakko (1986) *Investigating Wittgenstein* Basil Blackwell
- Kenny, Anthony (1973) *Wittgenstein* Allen Lane
- Malcolm, Norman (1958) *Ludwig Wittgenstein: A Memoir* Oxford University Press
- Malcolm, Norman (1986) *Nothing is Hidden* Basil Blackwell
- Pears, David (1987) *The False Prison* 2 volumes Clarendon P.
- Ramsey, Frank (2013) “Facts and Propositions”. *Truth. Proceedings of the Aristotelian Society. The Virtual Issue No. 1*. pp.1-14. (This was originally published in *The Proceedings of the Aristotelian Society, Supplementary Volume VII* in 1927.)
- Soule, Antonia (1989) “Wittgenstein and Phenomenology or: Two Languages for One Wittgenstein”. *Wittgenstein in Focus*. B. McGuinness and R. Haller (eds.) Grazer Philosophische Studien. pp.157-183
- von Wright, G. H. (1982) *Wittgenstein* Blackwell

(いはら ともあき 英語コミュニケーション学科)